

特色ある教育活動

地域に根ざした学校教育の創造

～**共学**共に学び **共創**共に創造し **共生**共に生きる～

平成29年度北海道今金高等養護学校第1回学科全体交流会 (模擬株式会社 IMAKANE FACTORY総会)

1 設立の趣旨

本校は職業学科設置の単置高等部ですが、生徒の実態の変化に加えて、就労に当たって求められることが今後変化してくると思っています。具体的には、生徒の実態として作業学習の目的や業務遂行上の留意すべきことについて、就労後の生活と関連させて丁寧に気付かせたり、理解できるようにする必要があります。また、発達障害のある生徒の多くが、持っている知識に比べて社会性の発達に遅れがあるため、障がい認識が進まず現場実習そのものに高いハードルを感じ、つまずきやすいことがあります。このような生徒が、社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようになるためには、ほめられたり感謝されたりする機会を増やし、生徒の自己有能感が高まる場面設定が必要になります。就労の場では、今まで以上に業務遂行上の課題を発見して改善することができる能力が求められるようになって考えられます。

そこで、就労への円滑な移行を目指すとともに、「会社で働くこと」の意味や意義、実践的な職業能力・技能や態度を培うために、今金高等養護学校では、PTAと協力して4月末のPTA総会で、模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の設立を決定しました。

2 第1回学科全体交流会(模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 総会)

そして、このほど「第1回学科全体交流会」兼「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 総会」を行いました。

始めに高嶋利次郎校長から、「模擬株式会社として作業をしていくことで、社会の仕組みや会社の仕事がより自然に身につくので、生徒全員が協力し合って素晴らしい会社となるようにしてほしい。」と挨拶があり、次いで、営業部長の金子亘喜教諭から、株式会社の定款、組織、年間の学習計画の説明がありました。

窯業科・産業科、農業科、生活家庭科・家庭総合科の代表生徒が、学科の年間の生産計画と販売計画を発表し、専門家(陶芸家)の指導を受けながら製品生産の工夫をすることや、八雲高等学校と「ショコラクッキー」の味とパッケージを共同開発をすることなどが報告され、承認されました。窯業・産業科では、陶芸の専門家(窯業アドバイザー)から学校祭で販売する商品の絵付けの方法を学んでいることが紹介されました。農業科は農家(農業アドバイザー)から指導を受ける予定です。クッキーは、昨年度の創立20周年記念事業で、町内の多機能型事業所ワークショップいまかねと共同開発した商品ですが、今年度は地域の定番商品とするために、八雲高等学校と共同で製品化する予定です。

また、役場での町内会配布物の仕分けサービス(毎月2回)、町民センターや総合体育館などの公共施設の環境整備(毎月1回程度)、総合福祉施設での「車いす清掃」(毎月1回)などの校外での受注作業の計画が紹介されました。今年度からは総合福祉施設での「利用者のレクリエーション活動の補助」(毎月1回)も行います。

このような校外での作業や受注作業は、模擬株式会社 IMAKANE FACTORY では、生徒の実態を踏まえ、自己肯定感や自己有能感の獲得・向上に止まらず、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会や社会との接点を強く意識することができる活動として重視しています。

特に、校外で行う受注作業(地域との協働活動)は、地域の関係機関の業務を補助する活動として、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることにより、関係機関の職員や町民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めるとともに、関係機関の職員や町民は、障がいのある生徒との接し方を活動を通して自然に学ぶことが可能となるのみではなく、生徒が地域コミュニティーを支える存在となることにより、

卒業生が地域に溶け込んで町民との交流を楽しみながら就労する「共生社会の実現」に資することができます。

今年度からは町内中学校の３年生全員を対象として、交流及び共同学習の一環で「窯業体験活動」の補助を行っています。町内の認定こども園での「雪山作り」や「迷路作り」の補助、今金小学校の学級園の整備作業、同じく６年生の卒業証書用紙を本校で生活家庭科の生徒が指導して制作する活動を行っています。



窯業科・産業科の年間計画の説明（総会）



模擬株式会社 IMAKANE FACTORY ロゴマーク

学科共通作業

個々の生徒の進路に応じて、流通・サービス、環境整備、食品加工の作業を行っています。

流通・サービス



役場での仕分け作業



総合福祉施設での車いす清掃



総合福祉施設でのレクの補助



今養版商品管理システムへの商品登録



仕入れ明細書の記入



入庫準備完了

環境整備



町民センターの環境整備



小学校の学級園の環境整備



健民グラウンドの環境整備

食品加工



ショコラクッキー「チョコっと ひといき。」
商品パッケージ



「チョコっと ひといき。」
試作品



檜山北高等学校での食品加工体験

模擬株式会社 IMAKANE FACTORYの取組

北海道今金高等養護学校は、平成9年度に知的障がい者のための職業学科の高等支援学校として開校しました。現在、窯業科・農業科・家庭総合科の3学科を開設し、学校教育目標を達成するため、生徒の実態に応じて作成した「今養版キャリアプランニング・マトリックス」に基づいて教育課程を編成し、キャリア教育と「社会に開かれた教育課程」の充実に努めています。特に、産業構造の変化、生徒の障がいの多様化、就労先が流通・サービス業に広がるなどの変化を踏まえ、生徒に育成すべき力として、主体的に業務遂行上の課題を発見し改善する能力、消費者ニーズに応じた商品開発力、組織が目指す目標に向かって努力し貢献する能力や態度を育て、職業生活への円滑な移行を推進する必要があります。

そこで、「模擬株式会社」を設立するとともに、今金町と本校が「就労支援並びに自立支援に関する連携協定」を締結し、地域の専門家や機関と連携した「地域学校協働活動」の推進を図り、「協同学習」を活用して製品の質の向上と新製品の開発・販売を行い、地方創生の担い手となる人材の育成に努めています。

1 「模擬株式会社IMAKANE FACTORY」

P T A総会において設立を決定し、生徒全員が一人500円の出資金をP T Aから受けて模擬株主及び社員となりました。代表取締役社長はP T A会長であり、総務部、営業部、生産部の3部体制で、営業部と生産部には各学科の1～3年生から班長が1名ずつ選出されて所属しています。職業学科の生産、商品開発、商品管理、販売、受注作業を模擬株式会社で行い、「会社の仕事」という意識で生産、商品開発等に意欲的に取り組み、質の高い製品や商品開発ができるようになりました（資料1）。

2 外部の専門家と連携した製品開発

窯業科の作業学習に地域の陶芸家による絵付け技法を導入し、年3回程度直接学年ごとに指導を受けながら製品開発を行いました。陶芸用クレヨンを用いて生徒がデザインした一点物の絵付けや、呉須を用いて多様な実態の生徒が制作できる製品作りができるようになりました（資料2）。

3 外部の機関と連携した商品開発

本校家庭総合科が北海道八雲高等学校3年生と「ショコラクッキー」の味とパッケージデザインを共同で商品企画しました。9月の北海道高等学校商業教育フェアと本校学校祭で販売するため、それぞれの購買層を考慮して、3種類の味の組み合わせ、パッケージデザイン、商品名を開発しました。製造する社会福祉法人では、地域の土産品として継続して製造・販売していく予定です。現在は町内のホテルの売店で販売されております（資料3）。

4 地域学校協働活動としての受注作業（委託）

地域学校協働活動の一つとして、役場で町内会配布物の仕分け作業（月2回）、総合福祉施設で車いす清掃（月1回）、高齢者のデイサービスのレクリエーション活動の補助（月1回）、公共施設の環境整備（月1回）、町内の認定こども園や小学校の環境整備等（不定期）を関係機関のスタッフの補助として活動しています（資料4）。

5 生徒の声

○ 商工会セミナー

- ・ 講 師 小川ひとみ氏（小川食品取締役、今金町議会議員、本校学校評議員）
- ・ 日 時 1・2学年：平成29年10月16日（月）5・6校時（学年ごと）
3 学 年：平成29年10月23日（月）5校時
- ・ 内 容 「流通のしくみについて～ものを作って売るために大切なこと～
■仕入れ、販売の方法や工夫 ■商売や商品開発をする上で大切なこと
■小川食品で大切にしていること ■ショコラクッキーを一般販売する際に大切なこと

「商工会セミナーで学んだこと」

(1) 姿勢や身だしなみ

- きれいな服装や笑顔で挨拶や丁寧な言葉遣いをすること、良い印象を持っていただけるような言葉かけが必要である。練習をしっかりと行って本番に臨みたい。

(2) 接客～コミュニケーションの大切さ

- 自分の商品とは関係の話で声をかけられても必ず対応することが大事である。
- 販売では、お客さんの前で暗い表情だと、「あの子、元気なの？」と思われてしまうこともあるのでもっと明るくしようと思いました。
- 製品を買っていただくには買ってくれる人のことを考えて丁寧に作る。
- 自分は販売の際にお客さんから声をかけられる前に自分から声をかけていきたいと思った。
- 自分の学科の商品を買わない方にも「また、よろしくお願いします。」と声をかけたいと思った。
- お客さんと接客をする中でお客さんの求めているものを考えて、商品を買ってもらえるような接客をしたい。
- 接客の際の敬語や声を大きさが大切である。

(3) 商品開発

- 新しい種類の商品を作り続けたり、その商品にこだわりをもったりすることが大事であることがわかった。
- お客さんのことを思いながら製品作りをすることが大切であることがわかった。
- 良い商品を作るために時間を何年もかけて、工夫をたくさん重ねたことはすごいと思った。

(4) その他

- お客さんが見やすいような陳列が大事である。
- セミナーを聞き、学校祭に向けて忙しくなるので指示をしっかりと聞き、一生懸命がんばりたいと思った。
- 自分の作ったものを買ってもらうことでやりがい生まれると思った。
- 食品に関しては衛生管理が大切である。
- 自分のためではなく、誰かのために働くことが大切であると思った。

○ 模擬株式会社代表生徒の会議（平成29年11月6日）から

○ チラシ作り

- 商品へのこだわりを短い言葉（文章）で説明する。
- その商品を買いたくなるような見た目にする。
- 製品の写真や作業の写真、製品の使い方や製品を作るときに工夫したところ書く。
- 学科の製品を漫画風に紹介したいと思った。
- 作業の様子を入れてはどうか？

○ 学校祭の販売会に向けた確認事項

- 笑顔で明るいあいさつとていねいな言葉遣いをこころがけましょう。
- 良い印象を持っていただけるような言葉かけをしましょう。そのためには、練習をしっかりと行って本番に臨みましょう。
- 自分の商品とは関係の話で声をかけられても必ず対応しましょう。また、自分の学科の商品を買わない方にも「また、よろしくお願いします。」と声をかけましょう。
- お客さんから声をかけられる前に自分から声をかけていきましょう。
- 接客の時は、敬語を使って接客しましょう。
- お客さんが見やすいような陳列をこころがけましょう。
- 食品に関しては衛生管理を意識して、手洗いをしっかりと行いましょう。
- 自分のためではなく、誰かののために働くことの喜びを感じて、素晴らしい学校祭にしましょう。

○ 学校祭を振り返って～模擬株式会社になって変わったこと～（生徒アンケートと部長会議〔1月17日〕から）

○ 営業部

（仕入れ商品）

- ・仕入れ商品を販売することになり、町内、道内、道外から商品を取り寄せた。また、販売する場所も増えた。

（のぼりの制作）

- ・IMAKANEFACOTORYのロゴが入ったのぼりを作成し、販売の時に設置した。

（商品の流通にかかわって）

- ・販売する商品にバーコードを貼るようになった。
- ・バーコードを貼って、作業がスムーズになった。

（販売方法）

- ・（お客さんの負担を少なくするために）移動販売が行われた。
- ・学科販売では、学年ごとではなく、1～3年生で協力し、学科全体で販売することができた。また、移動販売はたくさんの人と話すことができたり、お客さんの商品に対する本音を聞いたりすることができたのでとても良い経験になった。

（商品の値段）

- ・自分たちが作った商品は、安くて使いやすいと評判であるが、移動販売の商品は一つ一つの値段が高いという声を聞いた。

（お客さんへの商品紹介）

- ・今年から商品のチラシを作って販売商品の紹介を行った。

○ 生産部

（商品の数量）

- ・売る商品の種類が増えた。
- ・先生方だけで考えるのではなく、自分たちだけで考えてあまり先生たちに頼らないようにした。
- ・自分たちのやるべき仕事が増えた。
- ・学科ごとに販売する商品の種類が増えた。

（商品の質）

- ・昨年に比べて販売会で販売する商品の質が高くなった。来年度はもっと素晴らしいものにしたい。

（商品開発）

- ・豪雨で被害を受けた九州地方の粘土の名前を学習し、その粘土を使って製品を作った。
- ・学校祭で販売する商品（チョコっとひといき）を他校の生徒と一緒に考えた。
- ・IMAKANEFACOTORYのロゴが入ったカップを製作し、販売した。

○ その他

（組織）

- ・模擬株式会社代表生徒として、各学科から代表する生徒が選ばれた。
- ・IMAKANEFACOTORYがスタートし、担当する生徒の話し合いでたくさん悩んだが、担当する商品が全部売れてとてもうれしかった。

○ 模擬株式会社代表生徒の会議（平成30年1月17日）から

○ 昨年度との違い

- ・会社と学校（授業）の区別が分からない。
- ・受注の品を届けた時には、会社のような感じがしたが、あとは作業学習の授業だった。

○ 模擬株式会社でこれからしてみたいこと

- ・外部とのつながりをもっと持ちたい。（野菜の販売、お客さんがほしいものを作り届ける）
- ・全学科のコラボレーション
- ・学科内の全学年で協力して商品を作る。

○ 会社についての学習

- ・あると会社のイメージがつかみやすい。
- ・IMAKANE FACTORYで、何をしたらよいか考えやすくなる。

○ 学校祭と販売会の日程

- ・3年生では、忙しくて余り製品を作れなかった。
- ・劇の練習と製品作りが忙しくて、空回りすることがあった。
- ・別の日の方が余裕があると思う。
- ・3年間続けたので、忙しくてもくじけなかったから、そのままでいい。

○ 意見・要望

- ・バーコード対応のレジが必要。産業科はバーコード対応のレジではなかったので、意味がなかった。バーコード対応なら、やりやすくミスなくすむーずなのではないか。
- ・学年の枠をこえて一緒に製品を作ることはできないか。
- ・校外で売る活動はできないか。
- ・コラボ商品を作れないか。
- ・会社のイメージは、「失敗できない。」イメージ。「会社とは」という所から勉強したい。分からないことがたくさんある。
- ・模擬株式会社が始まって受注が増えたが、今までと変わっていない。商品管理とはどんなことをするのか勉強したい。
- ・受注・納品した時は会社と感じた（受注を増やす）。